The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<Book Review>Harry Collins and Robert Evans, ”Rethinking Expertise.”, The University of Chicago Press, [2007] 2009.
Author(s)	吉岡, 千慶
Citation	年報人間科学. 2017, 38, p. 241-246
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60459
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈書評〉

Harry Collins and Robert Evans
Rethinking Expertise
The University of Chicago Press, [2007] 2009.

吉岡 千慶

2011年3月11日。その日、運命は訪れた。近年まれに見る未曾有の大災害が2 万人近くの命を奪った。神話の終わりは永き災禍の始まりを告げ、フクシマは歴史に刻印された。フクシマをめぐる専門家の見解は混乱を極め、彼らの言葉は怒りと虚しさの渦中へと消えていった。5年の歳月を経ても、日出づる国に日の目は見えない。

原発という「最高」の技術について誰が話し合えばよかったのだろうか。利権に群がる蛆虫か。はたまた悲劇のヒロインか。それとも高慢な有識者か。

この問いを“外延性の問題（Problem of Extension）”として議論しているのが、『Rethinking Expertise』である。本書は、科学技術社会論を主なフィールドとして活躍するHarry CollinsとRobert Evansによる共著である。索引を含めて159項と小著であるものの、科学と技術の実践が依拠しているexpertise（以下、専門知）を分析することを目的とし、専門知を研究する社会科学と哲学の両分野の架け橋となることをも目指した意欲的な作品である。

本書の構成は以下の通りである。

序　章　　なぜ専門知なのか？
第１章　専門知の周期律表1：普遍的専門知とスペシャリスト専門知
第２章　専門知の周期律表2：メタ専門知とメタ基準
第３章　相互作用的専門知と具体化
第４章　歩きながら話す：色覚異常・絶対音感・重力波における実験
第５章　新しい区分基準
結　論　　科学、市民、そして社会科学の役割
補　記　　科学研究の波

本書の問いは、「公的分野における技術的議論に誰が参加すべきか」という外延性の問題である。この問いに対して、技術に関する政治的決定は万人に開かれているべきである一方、技術的議論はいわゆる専門家のみならず“相互作用的専門知”を持っている人の間で行われるべきだ、と答えている。

序章では著者の支持する立場が述べられている。社会学ではエキスパートによる地位の獲得については分析されてきたものの、専門知の分析はなされてこなかったという。それゆえ、専門知についての新しい

社会学が必要であるとし、専門知の社会学を試みている。専門知を分析するにあたって、著者は実在論的アプローチを採用している。この立場において、エキスパート集団の実在的・実質的所有物として専門知は描かれる。また、専門知と暗黙知は本質的に関わっている。暗黙知とは、「それを所有している集団に社会的に没入することを通してのみ得ることができる深い理解」（60項）のことであり、言語によっては明確に言い表すことができないという特性を持っている。そのため、専門知はエキスパート集団の成員となることを通して獲得され、暗黙知は専門知分析の1つである周期律表の中核にもなっている。

表 1

普遍的専門知（UBIQUITOUS EXPERTISE）					
性向 DISPOSITION	相互作用能力(Interactional ability) 反照能力(Reflective ability)				
スペシャリスト専門知 SPECIALIST EXPERTISES	普遍的暗黙知 UBIQUITOUS TACIT KNOWLEDGE			スペシャリスト暗黙知 SPECIALIST TACIT KNOWLEDGE	
	下敷き知 Beer-mat knowledge	一般的理解 Popular understanding	一次資料知 Primary source knowledge	相互作用的専門知 Interactional expertise	寄与的専門知 Contributory expertise
	多型（Poliomorphic） 単型（Mimeomorphic）				
メタ専門知 META-EXPERTISES	外在的(EXTERNAL) 変異した専門知 Transmuted expertises		内在的(INTERNAL) 変異していない専門知 Non-Transmuted expertises		
	普遍的区別 Ubiquitous discrimination	ローカルな区別 Local discrimination	技術的玄人性 Technical connoisseurship	下方的区別 Downward discrimination	参照的専門知 Referred expertise
メタ基準 META-CRITERIA	資格 Credential		経験 Experience		経歴 Track record

（本書 14 項より、訳は筆者によるもの）

第1章と第2章では、専門知の周期律表が説明される。周期律表は、普遍的専門知・性向・スペシャリスト専門知・メタ専門知・メタ基準という5つの指標から構成されている。

第1章では、周期律表のうち主に“普遍的専門知”と“スペシャリスト専門知”について述べられている。普遍的専門知は、人間社会で生活するために必要であるにもかかわらず言語化ができない技能すべてを含んでおり、社会の成員がその社会に生きるために持たなければならないものでもある。最も典型的なものは言語の流暢さである。具体的に言うと、日本社会で生まれ育った人は日本語のエキスパートとされる。この普遍的専門知はスペシャリスト専門知獲得の基底をなしている。

スペシャリスト専門知は“普遍的暗黙知”と“スペシャリスト暗黙知”の2つに大別される。前者は普遍的専門知において見出される暗黙知である。原則的に、スペシャリスト専門知のより高次の専門知を得るには、それよりも低次の専門知を持っていなければならない。

普遍的暗黙知に分類されるスペシャリスト専門知は“下敷き知”、“一般的理解”、“一次資料知”の3つがある。下敷き知は基本的な知識のことを指している。一般的理解は、マスメディアや一般書から得ることができる科学的分野についての情報である。一次資料知はインターネットなどを通じて得られた一次文

献などに依拠した知識である。これらの知識はスペシャリスト暗黙知を持っていないため、一般に言われる専門知とは区別されている。

一般に言われる専門知にあたるのは、著者の言うところの“寄与的専門知”である。寄与的専門知はスペシャリスト暗黙知の獲得が条件となっており、相互作用的専門知についても同様である。相互作用的専門知よりも寄与的専門知の方が高次ではあるものの、著者の議論は相互作用的専門知に焦点を当てている。

寄与的専門知とは「技能的な実践をすることができる能力の伝統的カテゴリー」である。寄与的であるというのは専門知を生産できる点に由来する。したがって、寄与的なエキスパートは専門的な行為を遂行し、専門知を生産できる点において重要である。行為遂行能力の獲得についての議論はDreyfusら（1986=1987）によってなされている。Dreyfusらは、身体的技能が内面化によって獲得される5段階モデルを提唱している。（1）ビギナー、（2）中級者、（3）上級者、（4）プロ、（5）エキスパートからなる5段階では、段階を上がるごとに経験依拠的で直観的になることが議論されている。

他方で、相互作用的専門知は「実践的能力は伴わないながらも当該分野の言語を習得していること」を指している。当該分野の言語を習得しているだけなので専門知は生産できない。具体例として、サイエンスライターが挙げられる。サイエンスライターは当の専門知を生産することはできないものの、専門分野を深く理解し、その理解を糧に職を得ているのである。相互作用的専門知の由来は、技能的集団が持つような実践的でインフォーマルな知識と、本のような言語的でフォーマルな知識との間の空隙にある。それゆえ、どちらかと言えばインフォーマルな知識に近いものの、相互作用的専門知は中間的な性質を持っている。分野への全身体的没入なしでも、分野における完璧な言語的流暢さが得られることをこの発想は示唆している。

寄与的専門知は相互作用的専門知よりも高次であるため、寄与的専門知を持っている人は相互作用的専門知を持っているはずである。しかし、必ずしもそういうわけではないのだ。寄与的専門知の獲得は、潜在的な相互作用的専門知しかもたらさず、その発現には性向である“相互作用能力”と“反照能力”が必要であるとされる。この2つの能力はコミュニケーション能力であり、相互作用能力より反照能力の方が専門性は強い。寄与的専門知や性向は世代間で直接伝達できる。だが、相互作用的専門知は間接的にしか伝達できない。

第2章では、専門知を判断するための“メタ専門知”について述べられている。メタ専門知とは、「他の専門知を判断するために使われる専門知」（45項）のことである。このメタ専門知は外在的／内在的へと分けられ、外在的なものにおいては専門知が変質してしまうとされる。専門知が変質するとは、「何が専門知か」から「誰が専門家か」へと判断の基準が変異していることを指している。当の専門知の獲得を必要としない外在的なメタ専門知は、“普遍的区別”と“ローカルな区別”の2つに分けられる。普遍的区別は、「人間が話すことによって学んだすべてのことであり、誰が誰であるかの規則的な判断の応用」である。ローカルな区別は、「誰が信頼できて誰が信頼できないかを長い経験の結果として学ぶこと」である。専門知自体を迂回して結論に至るため、外在的なメタ専門知はステレオタイプ化してしまい、信頼できないとされる。

内在的なメタ専門知は、判断される専門知の実質を伴った知人を必ず含んでいる。この内在的メタ専門知では、専門知の実質を持ってなどいない嘘つきが問題となる。というのも、一般に、専門知を持っていると解釈できる行動をとる人を専門家と人は判断してしまうため、嘘つきがその間隙に巣くってしまう。内在的なメタ専門知には嘘つきを排除する、“技術的玄人性”、“下方的区別”、“参照的専門知”の3つがある。技術的玄人性は、「実践によって磨かれた玄人性を専門知全般へと応用して判断すること」である。下方的区別は、「寄与的専門知は寄与的専門知を持っている人によって評価されるべきだ」という発想に基づいている。だが、この評価は相互作用的専門知を媒介として行われるので、相互作用的専門知を持っている人は寄与的専門知を評価できる人として扱うべきであることが主張される。参照的専門知は、「ある分野から持ってこられた、その他の分野へと応用可能な専門知」である。

これらのメタ専門知を実際に測る基準、つまりメタ基準には資格、経歴、経験がある。資格は標準的な方法であるものの、多くの専門知は資格にあたるものを擁していない。したがって、資格よりも他の2つの方が良い基準であるとされる。経歴は記録の参照によって嘘つきなどの良くないものを排除できる一方、必要以上に対象者を排除してしまいがちである。よって、経験を指標とするのが一番良いとされる。

第3章と第4章では、本書で導入された相互作用的専門知の実在を、“強い相互作用仮説”によって証明することが目指される。強い相互作用仮説とは、「言語を媒介して専門知が判断されるとき、完全な社会化と言語的社会化は区別できない」ということである。すなわち、寄与的専門知と相互作用的専門知は言語的コミュニケーションを通じては区別できないということだ。第3章では前提が整理され、第4章で実験を通じた検証が行われている。

第3章の前提整理によると、完全な社会化は“社会的身体化テーゼ（Social embodiment thesis）”と、言語的社会化は“最小身体化テーゼ（Minimal embodiment thesis）”とそれぞれ対応している。社会的身体化テーゼは「社会集団への全身体的没入を通じて言語が獲得される」とする。一方、最小身体化テーゼは「身体的没入は必要ではなく、その言語的世界への没入を通じて言語が獲得される」とする。完全な社会化による言語の獲得は当然であるものの、それは言語的社会化によるものと見かけ上は区別できないということが著者の主張である。

第4章の実験はチューリングテストを基にしたものまねゲームである。チューリングテストとは、直接対面しないでコミュニケーションを行い、コミュニケーションを行った相手が人間か人工知能かを区別できるか試すものである。本章で用いられるものまねゲームはその応用であり、色覚異常、絶対音感、そして重力波の研究者といったマイノリティとそうではないマジョリティが互いのふりをしたとき、そのふりを見分けることができるかを検証している。結果として、マイノリティがマジョリティのふりをすることはできても、マジョリティがマイノリティのふりをすることは困難であり、このことから強い相互作用仮説を支持している。

第5章では、「公的分野における技術的議論に誰が参加すべきか」という外延性の問題が扱われている。この問題を考えるうえでの常識的な主張は、「話していることについて知っている」人のみが技術的議論に参加できるというものである。この常識に基づくと、参加できる人は寄与的専門知を持ったエキスパー

トだけだと一般的には考えられる。これに対して、技術的議論への参加は相互作用的専門知を持った人にまで拡大されねばならないことが主張される。

だが、技術的議論への参加が相互作用的専門知を持った人にまで拡大されることは、どのような人が実際に参加できるのかについては明確にしない。なぜなら、誰が専門知を判断すべきかの適切な水準としての“正当な解釈の位置(locus of legitimate interpretation)”が科学・技術と他のものとでは異なりうるからである。これは専門知の周期律表からは導き出せない。そこで、このことを論じるために、科学・技術と芸術、政治、擬似科学との区分が試みられている。例えば、科学・技術と芸術の正当な解釈の位置を比較すると、一般に科学・技術の方が知の生産者寄りであり、芸術は消費者の方に寄っている。ただし、科学・技術が公的に使用されることが目的とされる場合は消費者の方へと水準が移動する。

本書を締めくくる結論は「科学、市民、そして社会科学の役割」と題されている。これはすなわち、専門知と民主主義との間の緊張を緩和することが社会科学の役割であるということだ。この役割を果たすために、本書では技術的討論への参加を制限する一方で、技術に関する決定は民主主義的に行われるべきだという形で技術と政治を分けることが試みられた。

本書の大きな意義は、「専門知の生産」と「専門知を用いたコミュニケーション」は質的に異なるとして、それぞれ“寄与的専門知”と“相互作用的専門知”へと分けた点にある。翻って、この分類から社会学を眺めてみると、対象内在的な学問という社会学の特質がより一層明瞭になる。

専門知としての社会学は、寄与的であることと相互作用的であることの両方において二重性を持っている。寄与的であることの二重性は、対象である意味秩序自体の性質に由来している。この二重性は、社会学者だけではなく対象となる社会に所属している人びとも意味秩序を形成できることを指している。相互作用的であることの二重性は、社会学の暗黙知が「常識と脱常識の同時使用」という二重性を持っていることに由来している。結果として、社会学の暗黙知は日常語を共通言語として持たざるをえない。この共通言語があるために、社会学は対象社会とコミュニケーションできる一方で、誰もが「社会学的な」コミュニケーションをある程度流暢にできてしまうことになる。

このように、社会学は客観的な科学として揺らいでいるのみならず、専門知としても揺らいでいる。この揺らぎが意味しているのは、社会学が専門知として失格であるということではない。むしろ揺らぎは、社会学の社会への影響力、すなわち再帰性の強さを示しているのだ。ここから、社会学における再帰性は、客観的真理を探究する科学としての社会学にではなく、社会学の専門知としての性質に由来するとも考えることができるのである。意図せずして、著者が目指す専門知の社会学は、科学としての社会学と専門知としての社会学を峻別すべきことを教えてくれている。

専門知を補助線として「社会学とは何か」を考えることは、新たな反省の地平へと我々を誘ってくれる。社会学は反省を通して可能なより良い社会を提示するのだ。そのような社会学からすると、自己言及的に反省もできない高慢な専門家に社会を任せることはできない。社会構想は反省に基づいた謙虚さがなければならないのだ。そう、社会学こそが闇夜を払う光の鍵となる。謙虚であるがゆえにこう言えるのだ。

参照文献

Dreyfus, H.L・Dreyfus, S.E、椋田直子、1986=1987、『純粋人工知能批判』アスキー.